

アチェの学校教育における防災教育

フサイニ アチェ州教育局長

Husaini (Dinas Pendidikan)



本日お話ししたいのは、学校教育のなかでの防災教育についてです。学校での防災教育を考えるときに考慮すべきなのは、災害は大きな地震や津波だけではないということです。アチェの場合は津波の前に洪水とか干ばつといったようにさまざまな小さな災害があり、自然災害だけでなく社会の紛争といったかたちであらわれる災害もありました。

もともとインドネシアは災害が起こりやすいところで、インドネシアで暮らす者にとって防災教育は重要です。また、アチェにおいてとくにねらいとしたいのは、紛争が起こらないようにすること、紛争に対してどう対応するかということです。現在のところ平和な状況が続いていますが、これから10年、20年たつなかで再び紛争が起こらないともかぎりません。そういったことを念頭に置きながら、私どもは防災教育を進めています。

■ 防災教育カリキュラムの統一、 教師用読本の制作と教師のトレーニング

現在私たちが取り組んでいる課題の一つは、どのようにして防災教育の中身を統一するかということです。小学校は6年間ありますが、1年から3年までと4年から6年までとでは教育の位置づけを変えています。1年から3年まではテーマを設定して防災教育を行ない、科目としては設定していません。これに対して4年生から6年生までは、防災教育の科目を設置して進めていこうとしています。

インドネシアで防災教育といったときには、教育省のカリキュラムのなかでいくつか定められています。そこで扱われているのは地震、津波、地滑り、洪水、火山、それに加えて社会災害も災害教育で扱うべきものとしてつけ加えられています。

私たちはこれらのプロジェクトをUNDP(国連開発計画)の協力のもとで進めています。最初にどのようなものを教えるべきかを統一したうえで、それを現在のカリキュラムと整合性をもたせたかたちで実施し



資料6-1 防災教育用パンフレットと防災教育のようす

ていきたいと思っています。

現在、私たちは防災教育の教師用読本の発行を進めています。そこに挙げた最初の三つはそれらの本のリストです。4年生、5年生、6年生はすでに防災教育の科目が設置されることになっていますので、それに対応した読本を出しています。

また、教師のトレーニングも進めています。アチェにある23の県のうち10の県から教師を15人ずつ集めて、防災教育のトレーニングをしています。これらの教師がほかの教員に対して防災教育の仕方を広めてくれればと考えています。

また、それぞれの県から36の学校を選んで、それぞれの学校から4人の教師を集めて災害対応教育のトレーニングをしています。いずれにせよ、現在私たちが取りくんでいるのは10の県にかぎられており、これをもう少し拡げていきたいと考えています。

そのほかに新聞やラジオ、テレビを通じた広報もしています。とくに地元のテレビ局、ラジオ局、新聞を重視しています。ほかにも人びとの手に渡るパンフレットのようなかたちで災害教育の教材をつくって配っています。

ほかにも、UNDPとの協力のもとで災害対応の協力のプログラムを実施しています。パンフレットなどもいくつか発行しています。

■ ファシリテーター人材、教材の不足と 予算の問題

しかし課題がいくつかあります。一つはファシリテーターになってくれる人材が足りないことです。教材もまだまだ足りません。教員の能力もこれから養成すべき段階にあります。予算に関しても、なかなか上から降りてきません。とくに災害に関する教材や人材育成に関する予算が配分されないという問題があります。

今後も引き続きアチェの10県以外の全域にこの防災教育を進めていきたいですし、ほかにも政府機関以外のNGOや民間企業とも協力をしていければと思っています。



資料6-2 模型を使った防災教育

災害遺産とミュージアム 体験を次の世代にどう伝えるか

寺田 匡宏 国立歴史民俗学博物館



まず日本の博物館と自然災害についてお話しします。日本での博物館の歴史は、ヨーロッパのように長くなくて、比較的短いものです。博物館の概念は近代になってヨーロッパからもたらされました。日本で初めての博物館は1872年にできた東京国立博物館です。それ以来、博物館というものは日本に定着して、2005年のデータで、政府によって認定されている公式の博物館の数は1,196あり、それ以外に博物館とみなされている施設(博物館相当施設)は4,418あります。

つぎに、日本における自然災害についてお話しします。日本における自然災害としては、地震、火山噴火、津波、台風、干ばつ、大雪などの自然災害があります。自然災害と博物館展示の関係について言うと、日本では、地震、火山噴火、津波を専門にした博物館はありますが、台風、干ばつ、大雪に関する博物館はありません。それらは、県立や市立の歴史博物館でエピソードとして扱われています。

■ 災害の情報を次代に伝える 火山と噴火、地震、津波に関する博物館

ここからは具体的に自然災害に関する博物館をご紹介します。

火山に関する博物館には、以下の博物館があります。三松正夫記念館(北海道、1977~82年の有珠山噴火)、洞爺湖町立火山科学館(同上)、磐梯山噴火記念館(福島県、1888年の磐梯山噴火)、浅間山火山博物館(群馬県、1783年の天明噴火)、伊豆大島火山博物館(伊豆大島、1986年の伊豆大島噴火)、立山カルデラ砂防博物館(富山県、1852年の山体崩壊)、雲仙岳災害記念館(長崎県、1990代の雲仙普賢岳噴火)などです。1700年代という約2世紀前の浅間山噴火から、新しいものでは1990年代の雲仙噴火まで、多くの火山が噴火し、それに関する博物館があります。

資料7-1は北海道にある洞爺湖町立火山科学館です。洞爺湖町立火山科学館では、わりと伝統的な展示で、噴火で飛んできた石などが展示されて噴火のメカニ



資料7-1 洞爺湖町立火山科学館



資料7-2 火砕流の速度を体感できる
雲仙岳災害記念館の展示

ズムが説明されています。

資料7-2は雲仙岳災害記念館です。館内には噴火したときの様子や救援にあたった自衛隊のジープが展示されています。科学的な展示もあって、災害時のジオラマや、火山の火砕流は時速100キロ以上の速さがあるなどの内容が展示されています。この火砕流では多くの人が亡くなりました。

地震に関する博物館としては、震災復興記念館(東京都、1922年の関東大震災)、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター(兵庫県、1995年の阪神・淡路大震災)があります。

資料7-3が関東大震災の復興記念館です。今から



資料7-3 震災復興記念館



資料7-4 火災で焼けた自転車



資料7-5 視察する昭和天皇を描いた絵画



資料7-6 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター

100年近く前にできています。地震の後に起こった火災で3万人以上がなくなった場所に立てられていて、祈りのための建物もあります。記念館にはたくさんのもが展示されています。これらは災害遺産として展示されているものです。展示物としては、火災で焼けた自転車や救援に使われた道具などが展示されています(資料7-4)。

当時は写真を大伸ばしする技術が未発達だったので、展示では火事の様子が絵で表現されています。現場を馬で視察する昭和天皇(当時は摂政)の絵が館内のいちばんよいところに飾られています(資料7-5)。

資料7-6はみなさんご存じの方も多と思いますが、阪神・淡路大震災を記念した人と防災未来センターです。ガラス張りの6階建ての建物で、側面には地震の起きた5時46分の文字が大きく書かれています。

津波に関する博物館は、防災センターのたぐいはいくつかありましたが、それほど多くはありませんでした。博物館としては、2011年3月11日より前は、唐桑半島ビジターセンター・津波体験館(宮城県、1896年と1933年の三陸津波)だけがありました。

率直に言って、3月11日の津波より前は、津波に関

する博物館はあまり強く意識されていませんでした。しかし3月11日後に状況が変わりました。日本では、東日本大震災の後に、改めて災害に関する博物館に脚光があたっています。災害遺物として、被災した建物や、打ち上げられた船を保存する動きもあります。津波に関する博物館建設の動きもあります。しかし、体験を伝承するのはたいへん難しいことです。

■ 博物館で体験を継承する際の 問題点とその解決法

災害などの体験を博物館で後世に伝えるには困難があります。体験を伝えるために、博物館ではジオラマや再現したイラストを使います。しかし、それをいくら精密に作っても、ほんとうの体験からは距離があります。体験を伝える差異の困難とは、その距離に起因します。

その距離とは、ジオラマやイラストとビジターの距離であると同時に、過去と現在の距離です。わたしたちはどのようにしても過去にはもどれません。だから、この距離は人間の宿命的なものです。しかし、人間は、過去の体験を後世に伝えなくてははいけません。では、どうすればよいでしょうか。



資料7-7 アクチュアルな展示の例①「棚へ」

そのカギは「展示のリアリティ」と「展示のアクチュアリティ」という言葉の中にあります。「展示のリアリティ」とはものをリアルに作ることです。たとえば、ジオラマをリアルに作ることはできます。けれど、リアルに作られたジオラマの前では、ビジターはただ見るだけの受け身でしかありません。受け身にかかわっている限り、過去との距離を埋めることは困難です。

一方、「展示のアクチュアリティ」とは、ジオラマを精巧に作るようにリアリティを求めることではありません。アクチュアルという言葉の通り、能動的に、アクティブに、過去にどうかかわるか、ということの問題にします。過去にアクティブにかかわることで、過去との距離を埋めることを目指します。そうすることで、「過去の出来事にかかわること」を現在の出来事とすることができます。

■ いかにして能動的に

過去の出来事にかかわることができるか

では、「展示のアクチュアリティ」はどのようにしたら可能なのでしょう。ここでは、ある展示の例で説明したいと思います。

それは、2005年に神戸で開催された「いつかの、だれかに」という展示会です。この展示会では、1995年に起きた阪神大震災の記憶を後世に伝えるために、「展示のアクチュアリティ」という考えにもとづいた作品が展示されました。

たとえば、「棚へ」という展示では、震災の一次資料の複製が床にあるケースに入っておかれています。ビジターはそれを読んで気になるところにマークして棚に入れることを求められます。棚は、未来への郵便棚という意味があります。ふつうの博物館展示では、資料はケースに入っていますが、ここでは、直接手に



資料7-8 アクチュアルな展示の例②「声と文字のあいだ」

とってマークすることで、過去へのアクティブな関わり方が生まれます(資料7-7)。

また、「声と文字のあいだ」という作品は、詩の朗読装置です。この装置の台の上には、震災についての詩がおかれていて、ビジターはマイクを通じてその詩を朗読することができます。その装置には、過去にその装置で朗読した人の朗読も録音されているので、ビジターの朗読は重ね書きのようにどんどんと上書きされていきます。声による重ね書きを通じて、過去に対してアクティブにかかわることができます(資料7-8)。

「Die Kindheit in Kobe 神戸の幼年時代」というDVDも上映されました。これは、震災時に胎児か乳児だった子ども(撮影時10歳)にインタビューした映像です。当時、胎児か乳児だった子どもは震災の記憶を語るができるのでしょうか。ふつうは不可能だと思います。しかし、彼らは、親や大人から教えられたことを自分の記憶として語ります。この映像は、ビジターに過去と現在の関係を考えさせ、過去にアクチュアルに関係するとはどういうことかを考えてもらうことをめざしています。

博物館は体験を伝承するためのたいへん重要な施設の一つです。博物館はその際にさまざまな遺物を使います。しかし遺物はモノです。モノは語りません。その際に博物館がなにを重要視しなければいけないかという、人びとがどのようにアクティブに関わることができるのか、モノに対して現在のわれわれがどう関わるかという方法を、さまざまに開発しなければいけないと思います。そのような方法を今日みなさまと議論できればよいですし、今後もいっしょに考えていければと思っています。

「負の記憶」の継承の側面から見た

津波7年後のアチェ——博物館・災害遺産の側面から

寺田 匡宏

私の専門は、災害や戦争など「負の記憶」に関する歴史学・博物館人類学で、これまで研究対象としてきた地域は、日本、北東アジア(中国、韓国)、ヨーロッパ(ドイツ、東欧ほか)である。2004年のスマトラ島沖地震・津波とその被害に関しては、関心をもってきたが、実際に被災地を訪れたのは、今回のシンポジウム・ワークショップがはじめてだった。私は地域研究が専門ではなく、また、インドネシア自体を訪問するのも今回がはじめてであったため、アチェ(インドネシア)の方々、および、インドネシア研究を専門とする日本人の専門家の方々から見ると的はずれで表面的な感想に思われることも多いと思うが、私の目から見た津波から7年目のアチェの状況について、「災害の記憶」の継承という観点を中心に、感じたことを書いてみたい。

◆復興への力強い歩み——全体的な印象

アチェを訪れて感じたのは、悲しみにおおわれた死の町ではなく、復興へのあゆみを力強くつづけているエネルギーにあふれた町という印象だった。私はアチェ訪問の2ヶ月ほど前の2011年10月に、3.11東日本大震災の津波被災地の仙台、石巻、女川などを訪ねる機会があったが、それらの町は、印象としては、静まり返っていて、まだ喪の作業の途上であり、今後の復興へのあり方をとまどいながら模索している段階に思われた。それと対比すると、アチェは、もちろん、悲しみや喪は存在すると思われるが、そこから脱して、復興への段階を力強く歩んでいる状況であるように思われた。これは、きっと災害からの年月と関係していると思われる。

エクスカージョンでは津波が来たと言われているエリアをまわることができたが、たとえば、津波が2階まできた市場は活気を取り戻しているように見えたし、中心部の村々は、各国の援助も含めて、家の再建が一通りは完了し、一段落しているように見えた。もちろん、海岸部に行くと、建物が根こそぎ無くなってしまった荒涼とした時間の止まったような風景が広がっていて、津波被害の大きさを7年後の現在もまざまざと感じさせたが、商業や

流通、政治の中心エリアに関する限りは、復興への力強い歩みがとどまることなく着実につついていることを感じさせた。

この印象は、インフラストラクチャーにかかわることだけではなく、人々の表情からも感じたことである。ワークショップには連日多くの方が参加して活発な発言をしていた。また、最終日には、TDMRCが主催する地域の小学校などが参加した防災フェスティバルの様子をみることもできたが、そこでは、生徒たちや先生たちが津波防災に関する工夫を凝らした展示を行っていた。その子どもたちの明るい表情には復興に向かっての歩みのたしかさを強く感じさせ



国立博物館と同程度の規模をもつ津波博物館

られた。また、同じく最終日のワークショップのムナスリさんの防災に関する講義には多くの小学校の女性の先生が参加していたが、その小学校の先生方がムナスリさんといっしょに津波防災に関する歌を歌う力強い歌声からは、津波の経験を次の世代に確実に伝えていくという強いアチェの人々の決意が感じられ、その歌声にはあれだけの大きな災害にもかかわらず、未来の明るさを信じるアチェの人々の願いが込められているようで強い感動を覚えた。

◆ワークショップの議論から

シンポジウムとワークショップでは連日にわたって活気のある議論が繰り広げられた。正直に言って予想を超える活気と熱気だった。とくに、発表に対する討論が徹底的に行われたのが印象的で、日本でシンポジウムやワークショップが行われる際には、発表に対する討論は時間の制約などによって、ともするとおざりにされることが多いため、今回のシンポジウムとワークショップでの「アチェ流」ともいえる討論の進め方は大変新鮮で、またとても良い方法だと思った。

ワークショップもシンポジウムも日本側とアチェ側の深い信頼関係と相互理解のもとに組織されていたことも印象深かった。シンポジウムとワークショップは、日本語とインドネシア語を使用することを基本として英語の使用は行われなかった。これは、主催者の強い意図によるも

のだったが、その方法は大変成功したと思われる。インドネシア側、日本側のどちらの発表者に対しても、インドネシア語での発表には日本語への翻訳が、日本語での発表にはインドネシア語への翻訳が、ほぼ逐次訳のようにしてその場で行われた。これは、時間がかかるし、はじめは迂遠なようにも思われた。しかし、全日程を終えてみると、少なくとも私に関しては、インドネシア側の参加者の発表に関する理解は格段に深くなったような気がした。ワークショップを通じて知り合ったインドネシア側の参加者の反応を見ても、インドネシア側の人々にとってもそれは同じだったと思われる。

このことは、徹底的な討論とならんで、地域研究がどのようなスタンスで地域社会や地域の人々と向き合うのか、どのようにして地域と相互理解に向かって歩むことができるのかということに対する本ワークショップの解答のひとつだったと思う。もちろん、それが可能になったのは、西芳美さん、亀山恵理子さん、服部美奈さん、浜元聡子さんなど、インドネシア研究の専門家の方々が通訳して下さったからである。細かいニュアンスまで伝える皆様のインドネシア語/日本語のすばらしさとともに、地域研究と言語の関係について大変多くのことを学んだ。

ワークショップの議論の中では、アチェの発表者と日本の発表者の間で、差異が目だったと言うよりも共通する課題があることが多かったことが記憶に残っている。私に関して言うと、私が発表したセッションの「災害遺産、博物館、ツーリズム」では、アチェの方々からは教育プログラムの実践の困難や、防災に関する内容を子どもたちに伝えることのできるメディアーターの重要性、公的な博物館だけでなくさまざまに民間で展開する津波の記憶の継承活動をどのようにつなげていくのか、などの課題が挙げられた。どれも、日本における課題と共通する課題である。それらをどのように解決していくのか、共通する課題が存在することが明らかになったことにより、次に行うべきことが見えてきたというのがワークショップの成果だったと思われる。

◆津波博物館——グローバルとローカル

以下では、博物館と災害遺産について述べたい。津波博物館については事前に、これまでアチェを訪れたことのある何人かの人(日本人)から、展示物はほとんどないという情報を得ていたし、現地でも知りあったインドネシアの方が同じことを口にするのもきいたが、実際に訪問してみると、それに反して、きちんと展示が行われていた。

1) 「Aceh Tsunami Museum」Wikipedia英語版。

想像するに、この間、徐々に展示物が充実して完成に近づいてきていたものと思われる。事前の情報は、その人がいつ、アチェを訪れたかによって異なっていたと思われる。

津波博物館に関しては3点興味深いことがあった。一つは、その建築の規模の大きさである。津波博物館は、2,500㎡のフロアが4層重なった施設である¹⁾。複雑な形態をしているため1層を単純に4倍すれば延べ床面積になるわけではないが、仮に単純計算すると延べ床面積が10,000㎡近い規模の建築物である。今日のグローバルに展開する戦争や災害に関する博物館の状況では、大規模化が特長のひとつである。たとえば、ベルリン・ユダヤ博物館(2001年開館)15,000㎡、人と防災未来センター(2001年開館)18,700㎡、ワシントン・ホロコーストミュージアム(1993年開館)24,000㎡など、いずれも延べ床面積10,000㎡を越えている。アチェ津波博物館はこれらと匹敵する規模を持つ施設であるといえる。また、インドネシア国内の他の博物館と比較すると、大規模な博物館としてはジャカルタに国立博物館がある。2007年にオープンした同館新館の面積



ベルリン・ユダヤ博物館

のデータを入手することはできなかったが、目視により3000㎡×4層ほどの面積ではないかと思われる。アチェの津波博物館はインドネシア国立博物館とも肩を並べる規模であるといえる。大規模化はグローバルなビジターを意識した結果であると考えられる。アチェを襲った津波は世界各国からの支援や関心を引き起こした世界的な事件だったが、博物館建築もそれにふさわしくそのことを意識したものとなっていることが興味深かった。

二つ目は、負の記憶に関する建築表現についてである。津波博物館ではメインの展示室に至るまでにいくつかの建築的表現を通過するようになっている。まずビジターは地下の滝の流れる狭い通路を通り、「神の光」のさし込む井戸の底のような空間を経て地上にいたり、「希望の橋」を通してメインの展示室に到達する。単に、展示物だけではなく、それ以外の建築表現の中を通過することによって、いかにビジターに「負の記憶」を身体的に知覚させるかは、近年の「負の記憶」に関する博物館建築での課題である。たとえば、ベルリン・ユダヤ博物館では地下からのアプローチや斜めになった床、ホロコーストタワーと呼ばれる上部からしか光が射し込まない閉塞した空間などを通じて、ビジターにホロコーストという「負の出来事」に身体を通じてアプローチさせる工夫が行われている。津波博物館でも、単に、展示物によって負の出来事を伝えようとするのではなく、現代の負の記憶に関する博物館の課題である、博物館の建築表現そのものを通じて

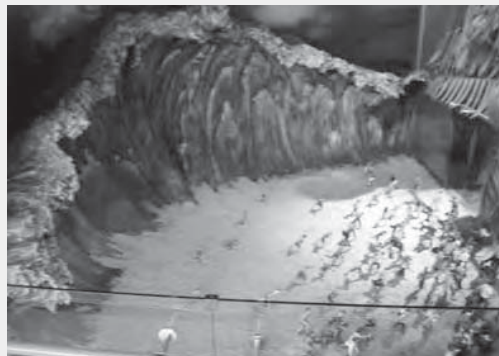
ビジターに負の出来事と現在の意味を考えさせるという課題に取り組もうとしていることが興味深かった。

三つ目は展示の内容についてである。展示は10分ほどの津波当時の実写が中心のドキュメンタリービデオからはじまり、アチェの歴史、津波被害の状況のジオラマ、復興の様子、津波のメカニズムと防災に関する展示という大まかなストーリーにそって組み立てられていた。アチェがどのような歴史的文脈のなかにあったかや、津波の被害の概観がよくわかる展示でビジターに津波に関する必要な情報を適切に伝えるものであると思われる。特徴的なのは、ジオラマが多用されていることで、日本やヨーロッパなどの、博物館であまりジオラマを使用しない社会とは対照的である。これは、ビジターの大半であるインドネシアの人々には親しみのある方法であろうと思われる。たとえば、ジャカルタの独立記念塔(MONAS)の展示でもほぼ同じ仕様のジオラマが展示されていて、人々に親しまれている。先ほど、津波博物館はグローバルに展開する博物館の動向の中にあることを意識していると述べたが、一方で過度にCGやその他の技術を追求することなく、地域の人々に親しみのある方法で展示を行おうとしていることも興味深かった。

◆災害遺産とツーリズム

今回のワークショップのテーマのひとつは災害遺産とツーリズムであった。エクスカージョンでは災害遺産にかかわる場所をいくつか訪問することができた。ただし、災害遺産といっても、どこまでが災害遺産でどこからが災害遺産ではないかの線引きは難しい。なぜなら、遺産は、遺産と認定する人がいて遺産になるものだからである。その意味で、津波によって運ばれた電力船や、津波によって運ばれて家の屋根の上に乗ってしまった漁船の例は興味深かった。山本博之さんがワークショップにおいて、電力船のまわりに、自然発生的に展示場ができたり、市場ができたりという変化が起こっていた

ことを紹介していたので、電力船がある程度、災害遺産として認知されていることは想像されたが、実際に電力船を見に行ってみると、予想を上回る出来事が待っていた。それは、電力船のまわりに塀が作られ、展望台



津波博物館で展示されているジオラマ



独立記念塔で展示されているジオラマ



塀で囲まれた電力船

が建設されていたことである。これはアチェ州による措置とのものであったが、災害遺産が災害遺産としてオーソライズされていく過程が目前で進行しているのを見ることができて興味深かった。

また、津波によって運ばれたものなどの直接の災害遺産ではないが、中国からの支援で作られた復興団地(Kampung Persahabatan Indonesia-Tiongkok 中国-印尼友誼村)も災害遺産とツーリズムを考える上で興味深かった。ここは、アチェ市外から車で東に30分ほどのところの高台にあり、そこからは、アチェの平野やインド洋を一望にながめることができる。団地のいちばん上の眺めがいいところには、眺望用のイスが並べられ、あずま屋やキオスクが作られていて自然発生的な観光スポットとなっていて、われわれが訪問したときも幾人かの中国系の観光客が訪れていた。これは、直接的な津波の災害遺産に関するツーリズムではないが、広い意味での津波という出来事から派生したツーリズムとしてとらえることができるとと思われる。ツーリズムは地域を活性化する側面がある。この村では、ツーリズムを商機ととらえ、積極的

にそれを利用することによって、ある種の活性化がもたらされているように思われた。

おそらく、それ以外にも津波に関係した遺産は多く存在するだろうと思われる。ワークショップの議論の中で、バンダアチェ市観光・文化局のサブティ・メルヴィタさんが民間に存在する博物館やモニュメントの情報を統合する方法やその必要について意見を述べ、また山本博之さんも「モバイル博物館」の提唱を行ったが、様々な形態で存在する津波に関する遺産に関する情報を集約し、それを線や面として結んで、外部から訪問する人に提供する

ことは、個別の場所で行われている個別の地域の活性化が集積することによるシナジー効果がもたらされるのではないかと思われた。

◆遺体の写真をめぐって

それを災害遺産とってよいのかどうか、「負の記憶」の継承という面からどのようにとらえたらよいのか困惑をおぼえたものもあった。それは、遺体の写真である。今回のアチェ訪問では、遺体の写真が直接的に展示されたり、提示されたりするのを2回ほど目にした。1回目は、電力船の横にある公園にあるあずま屋のような建物で展示されていた写真である。私は見なかったのだが、見た人によると、そこには遺体の写真が多く展示されていて、そこで案内役のようにしている地元の人が、「胎児が見えている」と言って、腐敗した妊婦の遺体の腹部から胎児がむき出しになった写真を説明してくれたという。そこでは、それらの写真をおさめたDVDも販売されていた。2回目は、ワークショップで知り合った学生によって、学生が私に津波の写真を見たいか、と尋ねたので、Yesという、学生が持っているパソコンのフォルダをあけて見せてくれたのが、ほとんどが津波被害にあった遺体の写真であった。

この二つ以外には、津波による遺体の写真は目にしなかったのだが、このことが強く印象に残り、また困惑させられた。第一に、このことに困惑させられたと言う場合、私の側の文化的な問題があると思われる。私が属している日本の現代の文化においては、遺体の直接的な映像表現は強く規制されていて日常的には遺体の写真を見ることはほとんどない。3.11東日本大震災の津波被害に関

しても、新聞やテレビや週刊誌などで遺体の写真が掲載されることはほぼ皆無だった。つまり、死体の写真の展示に関する困惑は、私がおこなったような文化的な文脈にあるため遺体の写真が公共的に展示されたり、とくに抵抗無しに見せられたりすることに困惑しただけのことだといえるだろう。

しかし、これは、負の記憶を考える上で、避けて通れない問題でもある。負の記憶の元となる負の出来事とは、多くの場合は、大量の死者が発生している。負の記憶というと、死者が発生したことは婉曲的に見えなくなっている

が、負の記憶の継承とは、実際は、死者の記憶をどのように継承するか、死者に対してどのような態度をとるかという文化的な問題だからである。

遺体の写真の表現は、文化により、時代により変容がある。たとえば、日本では1923年の関東大震災後には、多数の遺体の写真が絵はがきとして売られていた。現在、ドイツ国内の強制収容所跡地の施設で大量の遺体の写真を目にすることはあまりないが、ポーランドのアウシュヴィッツ博物館では大量の遺体の写真が隠すことなく展示されている。遺体そのものはもちろんだが、遺体の写真をどのようにあつかうかも、死をどのように扱うかということであり、文化的、社会的、歴史的な文脈に依存している。アチェ社会で死はどのように人々に考えられているのか、今回は、そこまでつこんだ議論をアチェの方々とはすることはできなかった。地域研究とは私の側のもの

の見方を再考し、その地域のものを見方がどのようなものなのかを知ることであろう。その意味で、アチェの方々にとって、遺体の写真が展示されていることはどのような意味があるのか、今後知ることができる機会があればと思った。

◆悲しみのゆくえと地域研究

津波にあった人々は、どのような悲しみや苦しみを持っていたのだろうか、あるいは今も持っているのだろうか、このことも知りたいことのひとつだった。もちろん、人々のほんとうの悲しみや苦しみがわずかな期間訪れた者にわかるはずはない。けれども、多くの人々が悲惨な目にあった場所を訪れるとしたら、その場所でどんな悲しみや苦しみがあったのかを知ることが必要なことではないかという思いがあった。

悲しみにふれたような気がした場所があった。それはひっそりと、だれもない部屋の中だった。それは、国際赤十字社のプレハブがならんだ中の一棟の中の一室で、そこは過去には日本赤十字社も使った建物だったというが、いまは、会議棟のようになっていて、現在の災害対応の状況をしめすパネルなどがおかれていた。その会議棟の一室に犠牲者から集められたIDカード、水に浸かった紙幣やその他の遺品、エクセルに入力された1万人以上の行方不明者のリストなどが並べられていた。それは、インドネシア赤十字社が津波直後に遺体の収容を行った



中国一印尼友誼村の「展望台」



遺体の写真の展示されていた建物

ときに遺体から回収したモノやデータとのことだった。その部屋は、積極的に「展示する」というよりも、赤十字社が持つことになってしまったそれらのモノをとにかく空き部屋だった一室のその部屋の壁に貼りださずにはいられなかった、というような感じに見えた。それには博物館の展示物のようなキャプションや陳列番号のようなものはなかった。しかし、それは強く見るものに訴えかけた。

ひとつにはそれが、IDカードだったと言うことがあると思われる。IDカードには写真が貼られていた。壁に貼られた何十のIDカードの中からは、死者となってしまった元の持ち主が、こちらをまっすぐに見ていた。そのすべての持ち主が津波によって生命を奪われたのだ

ということが心を揺さぶったのだと思う。また、その部屋の中に充満していた臭いも関係していたかもしれない。その部屋はそれほど大きな部屋ではなかったし、そのモノは壁のケースの中に貼られているとはいえ、ケースは木枠のケースだったから、部屋の中には水に浸かって腐敗したモノの特有の臭いがあった。その部屋の中にいて、人々が身につけていたものを見て、人々が飲み込まれてしまった水の臭いに体をつつまれたとき、津波に出会った人々の苦しみやその人々を失った人々の悲しみが迫ってくるような気がした。

とはいえ、それはあくまで、そこにいた私の想像であって、私の側の主観的な感情だった。そこで私は、津波の被害にあった人々の声を聞いたわけではないし、苦しみについての語りをきいたわけではない。

では、いったい、アチェの人々はどんな悲しみや苦しみを持っていたのだろうか、いまも持っているのだろうか。正直なところ、今回、私は、その答えを見つけるには至ら

なかったように思う。その答えを見つけるには、短い期間だったし、こちらにもその準備がなかったのだと思う。

しかし、今回、アチェに行ってみて、この「災害対応の地域研究」プロジェクトのメンバーがそれに肉薄しつつあることがわかった。たとえば、西芳実さんがすすめている



おじいちゃんの自宅で原稿を手にする西さん

「タイプライター・プロジェクト」で被災体験を元にした自伝をつづっているおじいちゃんの自宅を訪問する機会があった²⁾。おじいちゃんは、すでに数十枚の手記を書いていた。訪問したとき、おじいちゃんは津波の被害体験について、とくに悲しみについての話を聞かせてくれたわけではなかったし、どちらかという世間話に終始したように思う。しかし、人が心の中をうち

明けるためには、長い時間をかけて聞き手との信頼関係を築かれることが必要である。西さんとおじいちゃんの間には、その信頼関係が築かれているように思われた。

このような長期にわたる関係は、地域研究、とりわけ人文学の方法による地域研究が、災害という長期的な影響を社会に与える出来事に関与する際のメリットだと思われる。ワークショップの過程を通じて強く感じたのは、初めにも述べたが、長期にわたる調査によりアチェの人々との信頼関係が築かれているということだった。そこでは、インドネシア語をごく当然のように話される地域研究の専門の日本側のメンバーの方々が積み上げられてきたものの大きさを感じさせられた。私は、はじめに書いたとおり、インドネシアの地域研究が専門ではないし、インドネシア語も話せないで、実は、災害対応の地域研究に何ができるかまだわからない。しかし、ワークショップを終えてみて、負の記憶の継承に関心をもっている者の一人として、アチェで人々がどのようにして災害の悲しみや苦しみを語り継いでいくのかについてこれからも関心を持っていて、この研究プロジェクトを通じて、何かできることがないか考えていければと思うようになった。

2) 西芳実 2011 「記憶や歴史を結び直す：2004年スマトラ沖地震津波被災地におけるコミュニティ再生の試み」『季刊 民族学』138, pp.83-88.

世界の津波被災地から 世界の津波ツーリズム拠点へ

ラフマダニ アチェ州文化観光局

Rahmadhani (Dinas Kebudayaan dan Pariwisata)



私どもはつねに、アチェで起こった災害だけでなく、世界中で起きている災害に関心を向けながら仕事をしています。本日は、人びとの災害に対応する力を、観光を通じてどのように高めるかを考えたいと思います。

はじめに、アチェの津波の悲劇を世界の津波ツーリズムにつなげることについて考えたいと思います。

災害はどこで起こったものにせよ、いずれも非常にネガティブな結果をもたらしているといえます。単に物が壊れたり人が亡くなったりするだけではなく、社会全体の経済状況、社会状況、そして自然環境も含めた周辺の状況に大きな影響を及ぼします。

そのなかでも、特に戦争は大きなインパクトをもたらす災害であるといえます。第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして2004年のアチェの津波は、いずれも社会全体に大きな被害をもたらしたもので、人類社会にとって忘れがたい大きな危機的な事態をもたらしたといえるでしょう。

■「ともに前よりよいアチェを築こう」を 合い言葉に立ち上がる

2004年にアチェで生じた津波災害について申しあげれば、これは大規模な被害をもたらし、とりわけ多くの人が亡くなりました。人が亡くなったということは人材も含めて亡くなったということであって、社会に非常に大きな影響を及ぼしています。亡くなった方と行方不明者を合わせて25万人にのぼります。

あのとき私たちは「こんなことが起こるのか」とたいへん大きなショックを受けましたが、それ以後、私たちは「なにが起こっても対応する」という思いを強く持って生きてきました。

資料8-1に挙げたのは、私たちが普段暮らしていた町が一つの津波によってすっかり姿を変えてしまった、私たちの忘れられないあの一日の写真です。

私たちの津波後の再建の合い言葉は、「さあ、いっしょに前よりもっとよいアチェを築こう」でした。そ

のような思いをもとに私たちはここ数年暮らしてきて、いまここに立ちあがってきているわけです。

私たちは多くのものを失いました。物を失っただけでなく、人材を失い、そして思い出を失いました。思い出、つまり生活の原動力となる記憶も失ったわけですが、それでも私たちはとにかく立ちあがろうとしてここまで来ました。そしてなんとかしてアチェの民の力を高めたいという思いでやってきました。

■アチェの経験を世界に、次代に伝えるための 津波ツーリズム

これからのよりよいアチェづくりのなかで必要なのが持続的な観光開発です。別のいい方をすれば津波遺産ツーリズムとも言えます。アチェでツーリズムを促進することはアチェがもともと備えていた地域のかたちに即しています。アチェは歴史的に東西交易の拠点になってきたことがありますし、さまざまな歴史的な遺物があります。また、世界各地の交流の結節点



資料8-1 津波直後のようす



資料8-2 津波直後のようす

として文化も特徴的です。それらのものを活用しながら、それに加えて人類史的なできごとである津波の遺産を活用してツーリズムを発展させたいと考えています。

しかし、津波ツーリズムを進めるうえで気をつけなければならないことがあります。それは、私たちがあたたかも津波の遺産を商売の道具に使っているのではないかと見られることです。私たちがアチェで起こったことがらをもとにツーリズムの振興をと言うときに念頭に置いているのは、過去に起こったことがら、私たちの経験したことがらを商品として扱うのではなく、教材として、学びの素材として活用することです。そのような意味で私たちはツーリズムといっています。

津波の遺物は世界の人びとの関心をひいており、世界の観光市場で有効なものだと考えています。これを積極的に活用することで、地域の人びとの活動も活発になると考えています。しかし忘れてはならないのは、それは観光のためだけにあるのではなく、すべて災害対応の力を強めるためであるということです。

バンダアチェが津波ツーリズムの拠点になるということは、バンダアチェが津波からの復興の生きた実験場になるということ、すなわちこの場で人びとに起こっていることがほかの人びとの学びになるという意味での実験場になるという意味だと思います。

私自身も、海外の博物館について学ぶために神戸に行ってきました。私の見るところ、神戸の「人と防災未来センター」もまた一つの観光の拠点になっていると

思います。このようにツーリズムとして津波を活かし続けることは、私たちがあの日起こったことと、その後を経験したことを忘れず、次の世代に伝える意味で意義があると思います。

資料8-2に挙げたのは、津波後のようすを示したものです。これを見るだけでも胸が痛みますが、このような記憶こそ子どもたちに伝えていかなければいけないと思います。

私たちが世界中の人びとにアチェに来て感じてほしい、見てほしいと思うのは、津波の遺物そのものではなく、それにまつわるお話、私たちの語り、思いであり、それを共有してほしいのです。私たちは世界からやってきた方がたに感謝したいですし、今後もそのような関係をつくっていきたいと思います。そして、このように観光を通じて住民の経済力を強めることも重要だと思います。

■ 生き残った人々の記憶を活かし 津波博物館を世界的な防災のシンボルに

資料8-3に挙げたのは、私たちが考える津波ツーリズムの代表的な拠点です。

いまこの会場となっている津波博物館は、まさに津波ツーリズムを通じたアチェ地域の創造的な復興、災害対応力の強化のアイコンになると考えています。そして津波博物館が災害対応の拠点になるよう願っています。津波博物館が媒体となって若い人たちの災害対応力が向上するのではないかと思います。また、津波博物館がきちんと機能することによって、災害だけではなく人びとのさまざまな事柄に対応する力も拡



資料8-4 津波の遺産として整備される公園

資料8-3 津波ツーリズムの拠点

津波博物館

津波避難棟

大モスク

ランプウ・モスク

シアクアラの墓所

集団埋葬地

「世界の国々にありがとう」公園

げることができるのではないかと考えています。

博物館どうしの協力も、インターネットなどを通じてどんどん進めたいと思います。

重要なのは、人びとの意識だと思います。そのうえで、口頭で伝えられる情報も重要と考えて、そういったものを集めるプロジェクトも行なっています。

資料8-4に挙げた公園などをはじめとするさまざま

な津波の遺物が観光の拠点になると思います。

苦い経験というものは、苦ければ苦いほどやる気をかきたてるものだと思います。この津波博物館が一つの大きなシンボルとなって人びとの防災力を高め、また創造的復興に資することを願ってやみません。

重要なのは、生き残った人びとのことであると思います。生き残った人びとがこれからどのように発展していくのか、またさらに防災教育、災害対応力の向上という部分でいえば、これら生き残った人びとの語りを集めることが重要だろうと思っています。語りを集めるうえでは、人びとが話したいと思うようになるまできちんと待つことが重要です。

私たちはこの津波博物館を国際的な博物館にしたいと思います。そのためには、京都大学地域研究統合情報センターやJICAを含めた関係各機関と協力していきたいと思っています。

インドネシアにおける 観光と自然災害 社会的復興の方策として

浜元 聡子 京都大学東南アジア研究所



私はムスリムの格好をしています。別にコスプレをしているわけではありません。イスラム教徒のジャワ人と結婚しているためです。このような格好をするのは今回が初めてです。

■ ツーリズムを活用した災害復興がもつ 大きな可能性

日本人にとっては、観光と災害や被災地をくっつけることはなかなかイメージしにくいと思います。被災地で「津波まんじゅう」を売るとか「津波Tシャツ」を売るといったことは、なかなか思いつかないと思います。ところがインドネシアでは、そういうことがごくふつうに起こっています。

逃げまどう人びとを撮ったVCDやDVDを、被災した人自身が被災地で売っていたりします。あるいは、亡くなって聖人となってしまった人がキーホルダーになっていたりする。このようなことは日本人にはなかなかイメージができませんが、インドネシアでは起こっているのです。

ツーリズムを活用した災害復興には可能性ががあります。社会経済的な復興の方法の一つとして災害後のツーリズムを考えてはどうでしょうか。これには、被災者自身も関わるすることができます。

■ インドネシアにおける 村落開発としての被災地観光事業

ジョグジャカルタのムラピ山にはバ・マリジャンと呼ばれる山守がいます。2006年のムラピ山噴火の際には、マリジャンが住むキナレジョ村は被害をうけませんでした。2010年5月にムラピ山が再び噴火したとき、マリジャンは火砕流の犠牲になって亡くなりました。彼が住んでいた家は、現在、博物館になって火山災害の恐ろしさを伝えています。

資料9-1は、非常に多くの方が亡くなって荒涼とした火山灰に覆われたような被災地に「さあ、見学に行きましょう」と誘うツアーの呼びこみ文です。こういうツアーの広告が貼られていたりします。

被災地への観光は、インドネシアにおける村落開発のあり方に沿ったものです。インドネシアでは、10年ほど前に施行された地方分権法という法律があります。それまでは村落の近代化や開発にターゲットを置いた村落開発が謳われていましたが、村落にあるあるがままの自然や文化を観光の魅力として積極的に売りだそう、そして都会からの観光の流れをつくろうという働きかけを含んだ法律ができています。

村落での観光開発の例をいくつか見てみます。

資料9-2は、学生の社会奉仕活動がつくった観光地図です。ごみの分別を行っています。

被災者が誰にも援助を受けずに、自分たちでバイクを買いました。この立派なバイクに乗って、被災地周辺でどんなことが起こったのかをより詳しく見てみましょうというツアーを開催しています(資料9-3)。

■ コミュニティの再建とともに 観光客への防災教育にも役立つ被災地観光

被災地には観光客をひきつける魅力があり、観光は被災地の社会経済を復興させる上で活用することができます。

観光村としての村おこしをしてもよいかもしれませんが。その際に、被災地のシンボリックなものがあれば観光客をひきつけやすくなります。また、そのシンボルを共有しているという気持ちが新しいコミュニ



資料9-1 被災地ツアーの呼び込み広告



資料9-2 観光地図とゴミ箱



資料9-3 キナレジョ被災地区のバイクツアー



資料9-4 パ・マリジャンの写真をあしらった被災地の観光案内図

ティ再建の助けにもなります。災害とは、神が与えた試練というだけではなく、人々の関心や配慮、厚意を得ることもできます。野次馬が来ればみやげ物売る機会になります。被災したからといって、失望したり気落ちしたりしすぎることはないのです。

被災地に観光客がやってくるのは、もしかするとただの好奇心からかもしれません。けれども、人々の好奇心を利用することは、ツーリズムを通じた社会経済復興にとって一つの力になります。観光は新しい知識

を得る機会です。見学者は災害の経験を見て印象深く思うはずです。災害にどう対応するか、どのように復興するかという知識を得る機会になるはずです。

「観光」と「災害復興」とが結びついたとき、そこでは被災者自身がかなり積極的に関わることになります。これがジャワだけの事例なのか、ほかの地域でもそうなのかはまだ十分にわかっていません。しかし、とてもユニークな災害復興や災害支援になりうると思います。

被災地の観光化と日常生活をめぐって

浜元 聡子

2006年5月に発生したジャワ島中部地震に関わるようになって以来、インドネシア各地で発生した主要な自然災害などについて調べ、被災地を実際に訪れ、被災者からの聞き取りなどをおこなってきた。その過程で、ふたつのことについて考えるようになった。ひとつは、「スマトラ以降・スマトラ以前」とでもいうような、被災地とその外部支援者との関係があるのではないかということである。ふたつには、被災の当事者・社会による水際立った組織力や外部社会との交渉や協力関係が発揮される背景にはなにがあるのかということである。それを考えるひとつの切り口が〈被災地の観光化〉をめぐるさまざまな出来事ではないかと考えるようになった。

このようなことを考える一方で、〈本家〉のアチエを訪れる機会はなかなかなかった。わたしの調査地は、スマトラ以降では、2006年5月のジャワ島中部地震の被災地と、2010年ムラピ山噴火の被災地である。比較のために、2006年5月に発生した東ジャワ・ラピンド・プランタス社のガス井が原因とみられる泥火山の熱泥噴出とそれともなう広範囲に及ぶ地盤沈下の被災地も訪れている。スマトラ以前では、2004年3月の南スラウェシ州ゴワ県バワカラエン山山頂崩落による地滑りの被災地である。被災の規模も災害の性質もことごとく異なるため、単純な比較はできないが、〈観光〉の要素を含んだ外部者との関わりの有無が、復興過程の多様性と今日の特徴を表しているようにみえた。こういったことを考えていた時に、思いがけなく、アチエで開催される被災7周年記念ワークショップに参加できる機会を与えていただくこととなり、たいへんありがたく思った。

◆被災地観光のポジティブな可能性

ワークショップでのわたしの報告の骨子は、スマトラ沖の経験以降、さまざまな外部者がそれぞれに多

様な関わり方で、被災地の社会経済復興に関わるようになってきたこと、また被災社会自身も次々とやってくる外部者を利用して、観光復興とでもいうべき行動を起こしているのではないかということ、それがもっとも顕著に表れている様子は、インドネシアの四年制大学における必須学外社会奉仕活動(Kuliah Kerja Nyata; 以下、KKN)のプログラムに見ることができるのではないかというものであった。そして、災害復興における観光復興は、ポジティブに利用される意義があると結論づけた。



半球型の半永久型被災者住宅

被災地の観光化というと、個人的には多少の倫理的な抵抗のようなものを感じないわけにはいかないところがある。しかしインドネシアでの事例を多く踏まえてみると、被災地社会において、皆が前向きに明るく復興に取り組むことができるということを最重要視するとすれば、観光は打って付けの手段に思われてくる。たとえば、幼稚園や小学

校の遠足あるいは社会見学、PKK(婦人会)などの視察といった目的で週末には数珠つなぎに観光バスや自家用車が訪れることで有名な被災者シェルター村がジョグジャカルタにある(ドーム型避難シェルター)。

インドネシア人にとってのファストフードに相当する牛肉の団子汁(Bakso)を、今まで誰も試みることがなかったナマズの魚肉で作り、観光復興を目指そうというKKNプログラムも実施された。このプログラムは実際にはナマズ養殖がうまく行かず失敗したのだが、新聞やテレビニュースで報道されたため全国的な話題になったことと、明確に観光復興を念頭に主要テーマに据えたユニークなものであったため、学部横断的な教員の研究グループが結成され、調査研究に引き上げられて、複数年の予定で取り組まれることになった(ガジャマダ大学)。

みながみな、被災地のかわいそうな人を助けようという動機で被災地にやってくるわけではない。中には明らかに野次馬的関心や単純に被災地とはどのよう

なものであるかを見たいという気持ちにしたがってやって来る人もいる。だからこそ、そういう人々ターゲットとするさまざまな飲食屋台が被災地に現れるのであるし、被災を象徴するなんらかのアイコンがある場合には、それをモチーフとした土産物を生産する被災者も出てくる。このKKNのプログラムは、被災者もKKNの学生も、楽しく災害復興支援に関わってみたいという気持ちをストレートに表したものである。いろいろな人が長く被災地に関心をもってくれることもまた、なんらかの形で被災地支援につながるということなのかもしれない。

こういった傾向を、ポジティブに受け取り、かつ、なんらかの形で外部者が地域防災や日常生活における防災意識に関心を持つようになる相乗効果があるかもしれないと考えれば、(新しい考え方ではないかもしれないが)被災地支援に有効な関わり方のひとつとして、観光を位置づけることができるのではないか。いや、それを考える場合、アチェではどうだったのだろうか。このことを、アチェで一番みたいと思っていた。またできるだけたくさんの人と、被災地の観光復興についての意見を交換してみたいとも思っていた。同時に、被災から7年が過ぎたアチェに暮らす人々の日常生活をぜひ見たいとも思っていた。

◆ほの見える援助をめぐる受け止め方の違い

ワークショップの発表は、どれも興味深いものであった。とくに深く感心したのは、参加者であるアチェの人々の災害研究に対する関心の高さであった。長時間にわたるワークショップにもかかわらず、途中退席する人もほとんどおらず、質問の内容もレベルが高く、わたしはひたすら感心するばかりであった。

その中で、個人的にもっとも興味深かったのは、いわゆるバンダアチェとその周辺地域とでは、災害復興をめぐる外部からの感心の向けられ方の多寡や、援助(物質的にも金銭的にも)の内容に対して微妙な受け止め方の違いがあることを示唆する質問がふたつばかりあったことである。

観光というフィルターをとおして〈被災地化〉していく被災地と、日常生活に追われながらいつのまにか〈被災地〉であったことを脱出していく被災地とが、ということなのだろうか。少なくとも、ジャワの被災地には当てはまる。しかしこれをひとつ〈観光〉ということだけで理解するのは困難でもあろう。また観光化することで、さらに一極集中的な関心の持たれ方の偏りが顕著になりもする。

ワークショップの場の外でことばを交わしたア

チェの人が忘れられない。「もしアチェに集まった義捐金がすべて正しく使われたのであれば、今頃、アチェ州はシンガポールみたいになって、インドネシアから独立していたはずだ」というものである。誇張もあるだろうし、認識の違いや理解の仕方の違いといったものもあるだろう。が、今、これだけ穏やかな生活を取り戻し、すっかりと再生したかのように見えるバンダアチェの街の中でも、さまざまな人々の意見が蠢いているのかもしれないことを思った。

◆被災前の日常はどの程度まで回復されたのか

津波博物館や街の中心部の有名なモスクの前庭に、休日の午後に集まり思い思いの場所で弁当を広げたり、写真を撮ったりしている家族連れや若い人々の集団をみた。ひじょうに平和な風景であったことが強く印象に残っている。被災以前からモスクの前庭が市民にとっての憩いの場であったのか、津波博物館に相当するような人々が集まる場所が別にあったかどうかを、誰かに尋ねる機会はなかった。しかし、少なくとも現在のバンダアチェに暮らす人々には、ごく日常的な平和な時間があることを確認したように思った。

また市内の各地に、働く母親のための長時間保育の乳幼児保育園があることにも強い感銘を受けた。わたしの子どもを一時預かりしてもらった保育園(PAUD: pendidikan anak usia dini)の施設は、近代的な清潔さと機能性を備える一方で、伝統的なゆりかごを多数配置するなど地域文化を取り入れたものであった。インドネシア各地でPAUDが開設されるようになっていくが、アチェの場合、働く女性が元々多かったのか、あるいは被災以降の社会変容となにかに関連があるのか。被災から7年を経たアチェの人々の日常生活を、ほんのわずかに垣間見ただけであるが、次から次へといういろいろな関心が呼び起こされたように思った。

被災以前の日常がどの程度まで回復されたのか、あるいは外部からの影響を受けてどの程度まで変容したのかについて、わたしは具体的なことはまだほとんど知らない。そういった日常生活を送る人々にとって、被災経験の観光化はどのような意味を持つことになるのだろうか。実際に、アチェの外から、明確な観光の意識をもってインドネシア人がある程度規則的にやってくるようになっているのだろうか。また被災を経験した人たち自身が、津波博物館やモスクの前庭に集まり語り合うのはどんな話なのだろうか。アチェで改めて考えたこれらの疑問は、〈アチェ以降〉の被災地で答えを探してみたいと思っている。

質疑応答

アブドゥル・ムザキル 浜元聡子さんのご報告にたいへん感銘を受けました。とくに文化人類学、社会学の見地から、災害後の人びとの対応をどのようにご覧になっているかに興味があります。自分の考えでは、被災後の人びとを支えているのは、なんとか立ちあがろうとする人びとの気持ちであったと思っています。そのようなことも含めて、文化人類学者が災害後の社会をどう見るのかに関心があります。

お伺いしたいのですが、災害後にアチェで変わったものがあるように思います。人びとの関係のつくり方も災害で少し変わったのではないかと。たとえば支援団体に与えられた復興住宅は、従来のアチェの人びとの住宅の規模とくらべると小さいものでした。以前は大きな家があって、そこに人びとが集まってさまざまな交流がつけられて人間関係が発展していました。現在はその元となる家が小さなものになっています。そういったところから人間関係や社会関係のつくり方が変わることがあるのではないかと思います。

アチェには人間関係が網の目のように張りめぐらされて、面倒を見る人と面倒を見られる人という組み合わせがある程度あったように思うのですが、そういうパトロン-クライアント関係のようなものが津波後になくなってしまったのではないかと思います。ジャワなどでは災害後もそういった関係が残っていたのではないかと思います。こういったことに関してぜひご意見をください。

質問者 まず博物館についてご報告された寺田さんに質問です。博物館が、たとえば災害対応や災害に関する知識の共有のメディアとして、人びとのあいだでほんとうに機能しているのでしょうか。博物館が人びとのあいだの情報共有や防災力を高めることに機能するものなのか、日本の状況をお教えてください。

それから、先ほど政府に認定された博物館のほかに政府に認定されていない博物館があるという話がありました。政府が認定していない博物館というのは具

体的にどのようなものなのでしょうか。個人の家で開いているものなどいろいろなものが想像できますが、もし例があれば教えてください。

二つめの質問は、教育局からいらしているフサイニ氏への質問です。災害教育といったときに、人びとは知識がなければ行動できないので、実際に行なわれている状況を確認したいと思います。

三つめは浜元さんへの質問です。観光局にも外国から報道関係の人が来て、しばしば「なぜアチェの人は苦しいの経験を商品にするようなことができるのだろうか」といわれました。このことについてどう思うか教えてください。

ミスワン(鉱業エネルギー局) 教育に関して質問です。学校に行く子どもたちに災害対応の教育が準備されていることはわかりましたが、学校に行かない子どもたちもたくさんいます。そのことを踏まえて災害対応の教育を進めていったらよいのではないかと思います。

博物館に関して、日本にこんなにたくさんの博物館があると知ってたいへん興味深く思いました。アチェでは、津波博物館の運営・管轄をしているのは州政府ではありません。津波博物館をどのようなかたちで地域に貢献するものにするのか、いろいろと考えなくてはならないのではないかと思います。報告者の方々はどうぞお考えでしょうか。

それから、浜元さんのジャワの経験はたいへん興味深く聞きました。ジャワの経験を踏まえて、アチェでも具体的に創造的復興を展開することはできないでしょうか。

■ 就学児童に教えることで周辺社会にも知識を拡げることをめざす防災教育

フサイニ 防災教育についてですが、実際に学校でどのように行われているかという、知識だけではなく実際の行動に結びつくかたちの授業をしています。

また、学校に行かない子どもたちという話がありましたが、私たちの防災教育は学校にいる子どもたちだけをターゲットにしているのではなく、学校にくる子どもたちに教えることで、その周辺社会に防災の知識や対応が拡がるというコンセプトです。その意味で、学校に来られない子どもたちのことも念頭に置いているといえると思います。

ラフマダニ ご指摘のとおり、津波博物館の運営に関してはいろいろな問題があって、とくに展示品が十分にそろっていないことが課題だと考えています。しかし、全部そろってから公開するのではなく、あるとこ

ろからみせることも一つの方法だと考えています。

管轄については、現在たしかに運営費の主要な部分は中央政府の鉱山エネルギー省から出ていますが、津波博物館自体はアチェ州政府の観光局の担当で、私自身も運営に携わっています。中央政府の鉱山エネルギー省の関与は予算の面だけで、2014年までです。

私ども観光局では、地域経済の発展に直接つながるかたちの観光をつねに考えており、観光に関わる人材の育成、お土産品の制作技術といったことも含めた人材育成を心がけています。

■ 小さな博物館が ネットワーク化することの可能性

寺田匡宏 第一に、日本では災害に関する博物館がどのようにメディアとして機能しているのかというご質問ですが、大変よく機能していると思います。

たとえば、1995年の阪神大震災に関する展示を行っている「阪神大震災記念 人と防災未来センター」は、映像やジオラマ、デジタル機器、モノ資料などを使って大変内容の濃い展示を行っていて、年間30万人以上の人が来館しています。物質的な側面や数量的な側面からは、メディアとして大変よく機能していると思われる。

といっても、それが、どのように人々に伝わっているのかに関しては、注意が必要だと思います。博物館で得た知識を生きたものにするためには、メディエーターや教育者の役割は重要だと思います。3.11災害の津波でも、避難が効果的に行われた学校では、災害前に教育者やメディエーターが知識を生きたものにする活動を行っていたことが知られています。フサイニさんが発表されていたように、メディエーターの役割は大変大きいと思います。

第二に、政府に認定されていない博物館は個人の家のようなものですかというご質問ですが、個人の家のようなものもあれば、NGO/NPOが設立した博物館もあります。ただ、災害に関する博物館としてはそのようなものはあまりなくて、戦争(第二次世界大戦)に関する博物館でよく見られます。災害に関しては、博物館以外に、さまざまな石碑や地蔵、壊れた建造物など

のような災害遺産もメモリアルとしてとらえられています。また、さまざまな追悼行事もあります。

第三に、州や政府の博物館ではないものが地域にどのように貢献できるのでしょうかというご質問ですが、より多くの人アクセスできるように、それらが開かれたかたちで結ばれることが必要ではないかと思います。州や政府の博物館ではない博物館などは、小さなものが多く、大勢がアクセスするには一見不向きかもしれませんが、それらがネットワーク化されると、より多くの地域の人がアクセスできるようになると思います。

山本さんと西さんが先ほど提言された「モバイル博物館」は、情報の共有を通じて地域にバーチャルな博物館を作るというもので大変良いアイデアだと思います。

■ 「シシ・ポジティブ」 ——ポジティブな見方をしてみよう

浜元聡子 最初のご質問に関しては「パトロン・クライアント」というキーワードを使ってジャワのケースを考えたことがまったくなかったので、おもしろい視点だと思いました。明日から勉強させていただきます。

二つめと三つめの質問に関しては、少し新しい見方をしてみてはどうかと思います。ジャワの人たちと同じように「シシ・ポジティブ」つまりポジティブな見方というものを探してみようということです。物を見たりすることは新しい被災経験の共有の仕方だと考えてみるのはどうかと思います。実際にドーム住宅では、観光客を泊まらせて、みんなで地震のときのことや避難所での生活のことを話しあったりするプログラムがあります。あるいは外部のNGOとか、防災教育のプログラムも受け入れました。こういうことを積極的にプロモートしています。

ですから、山本さんと西さんが紹介してくださったモバイル・ミュージアムという構想と、インドネシアにすでにある地方分権法のなかで明示されている観光村をつくるという考え方は、うまく結びつけると創造的復興に結びつくように思います。